大会終了後、ウェブ発表の当事者に今大会について尋ねたところ、肯定的な意見や感想が寄せられた。共通していたのは、異例の状況下で発表の機会が与えられ、貴重な経験となった、ということ。コメント欄を使った「文字」による質疑応答については、調べてから返信することもでき有意義だった、やりとりが保存されるので振り返りができた、返信を書くことで思考の深まりを経験できた、というように、口頭発表の質疑応答とは異なる、その内容の濃さが肯定された。その一方、表情・口調等が伝えられない文字でのやりとりは、相手にどう伝わっているのか掴みづらいところもあった、という当然の意見もあった。

百年に一度という感染症流行下、大会開催を見送る学会もあるなか、初めての試みだったが、ウェブ大会を実施できて安堵している。使い勝手のよい大会ウェブサイトを構築してくれた佐藤氏、ウェブ発表に挑んでくれた十名の発表者、そして、コメント欄への投稿の有無にかかわらず閲覧することで大会に参加くださった会員諸氏に心から感謝したい。「こえ」によらないウェブ上での発表と議論は、長短含めさまざまなことに気づかせてくれた。発表者のお一人の感想に、「こえ」や「文字」、「伝える」といったテーマに関心を寄せる口承文芸学会の研究発表大会として、とても意義のある内容だったのではないか、とあったが、私も同感である。それでもやはり、次大会は対面で開催できるようにと切望する。

（まみや・ふみこ／白百合女子大学）

【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

「非日常」から「日常」へ

―研究例会の実施をめぐって―

中村とも子・大島廣志・繁原 央・山田栄克
（例会委員会）

◆中村とも子

新型コロナウィルス感染の状況は二〇二〇年があと二月になろうとしている今でも変わっていません。今年三月の研究例会、六月の大会と、大事な研鑽の場が続けて中止や変更を余儀なくされました。秋の例会は、通常のかたちで行えるのではないかと楽観的な見通しを立てていましたが、日本の感染者は微増推移が続き、ヨーロッパを中心に諸国でも深刻な状況が報告されています。こうなってきますと、もはや、コロナと共にあることが当たり前と思って行動しなくてはなりません。十一月の研究例会はｚｏｏｍによるオンライン形式で行うことにしました。コロナ以前を「日常」、今を「非日常」と捉えるのではなく、コロナと共にある今、あるいは将来を「日常」とみて行かざるを得ないし、そうであるならば、私たちはどうしたら前に進めるのかを試行錯誤しなくてはならないと思ったからです。

例会委員の意見も思いも決して一枚岩ではありません。以下に、各人の率直な意見を記載します。そこにあるように、このようなやり方に置き去りにされてしまう会員もあるかもしれません。そこを改善する方法を模索していくことが急務です。しかし、とにかく続けていくことが学会活動の一番の基本ではないでしょうか。私が学生だった時にこの学会が創立されました。雑事を手伝っている学生たちに向かって、「学会ってね、作るのはとても大変なんだよ。でもつぶすのはすごく簡単さ。なにもやらなければいい」と、どなただったか覚えていませんが、冗談らしくおっしゃった方がありました。今はこの言葉が現実味を持っているように感じられます。私たちが追究していかねばならない学問的な問題は先が見えないほどたくさんあります。その成果を残す場として、また、自由で気のおけない学際的な交流の場として、この学会は継承されて行かねばならないと思います。

（なかむら・ともこ／東京都）

◆大島廣志

オンラインで研究例会を行うことについての「思い」を述べてくださいということですが、私はｚｏｏｍに慣れていなかったので、今回のオンライン研究例会に積極的な「思い」があるわけではありません。委員の多数によりオンライン開催が決まりましたから、ｚｏｏｍに対応し、研究例会の発表を引き受けることにいたしました。しかし、資料の添付など未だにできない状態ですから、オンラインでの研究例会発表者には難問もあるということを申し添えます。

来たるべきポストコロナを考えたとき、テーマによっては研究例会発表者全員が会場に集まるのではなく、それぞれが遠隔地にいても討議できるオンライン研究例会は、意義のある方法だと思っています。例会委員が任期中に担当する研究例会は四回ですから、そのうちの一回をオンラインで行うということを考えてもいいかと思います。

（おおしま・ひろし／東京都）

◆繁原 央

令和二年におけるコロナ禍により、世界中の社会がさまざまな変革を迫られているが、学会や研究会も同様な事態になり、模索している状況にある。そこで、この状況のメリットとデメリットについて考えてみた。

メリット

1、三密を避けるため遠隔による会の開催をすると、一箇所に集まらなくてよい。遠くの者でも簡単に参加でき、発表を聞くことができる。外国からも参加できる。

2、そのため経費負担が少なくてすむ。

3、工夫によっては新しい会員と出会える機会になるかもしれない。

デメリット

1、パソコンなどを使えない人は会に参加できない（年寄りでパソコン使用が出来ない人、機械を持っていない人の参加はなくなる）。

2、パソコン操作が不得意な人は、個人情報の流失などの不安

がいつもある。

3、フィールド調査がしにくいので、口承文芸学や民俗学のような対面による調査を基にした発表がしにくい。

4、対面でないため何となく疎外感がある。発表以外の個人的な会話がしにくく、未知の人との出会いの場になりにくい。

（しげはら・ひろし／愛知県）

◆山田栄克

本学会が大切にしてきたものの一つとして、言葉、特に声がある。研究例会は、その多くをシンポジウムの形をとっており、発表者ではなくパネリストからの意見を受けて会場内での質疑応答を経て、考えを深めていこうとする。これは開かれたものであり、例会委員に貫かれたものであろう。新型コロナの中で、延期や中止、今大会の研究発表のように文字による意見交換はもちろん検討されたが、やはり開かれた存在でありたいという考えから例年通りに近い方法はないか模索した。また、来年は二〇一二年から研究例会で取り上げてきた東日本大震災の三・一一から十年ということで、その時しかできない内容であって、この問題を後ろ倒しにすべきではないということも検討された。そういった思いでオンラインも用いた例会を十一月に予定した。こんな非日常が続く中だからこそ、それまであった日常を少しでも取り戻していただければと願う。

（やまだ・ひでかつ／東京都）

【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】「コロナ禍」を「福」に転じるための覚書
―『伝え』六七号から見えてくるもの―

佐藤　優（会報委員長）

『伝え』第六七号では、「密接」が忌避される厳しい状況下にも関わらず、研究及び各地の語り手の会等で精力的に活動をされている三人の方々からの調査や実践報告を紹介している。

具体的には、愛知県の枝下用水資料室で精力的な研究活動をされている達志保氏からご報告をいただいた。また、日本民話の会などの活動に長年携わっておられる米屋陽一氏、市川民話の会においてご自身も語りの実践経験豊富な根岸英之氏のお二方から、語り手の会などに関するご報告をいただいた。この詳細は、『伝え』をお読みいただきたいと思う。

お三方の報告で印象的だったのは、人と人とが集まり、そこから生まれる会話や語り、それに付随する活動について言及していることだった。これらの報告は、「新しい生活様式」が提唱され、人と人との密なる関係性が忌避された結果、逆説的に実際に顔と顔とを付き合わせて話しを語り・聴くという密接をともなう営みの重要さを改めて私たちに気づかせてくれるものだった。口承文芸学は、数知れないこのような営みの累積から成り立っている。私たちは、このことを忘れてはいけないだろう。そうした営みの興味深い一例を具体的に取りあげてみよう。

七日は朝各戸を巡った末にやっと見出した伝承者、嵯峨美代さんのお話を伺った。（中略）嵯峨美代さんは当時七十九か八十才とのことでお医者様のお宅のおばあさん。ずっとこの村で育たれた方である。（中略）「昼まムカシを語ると、山男にさらわれる」といわれていたが、このタブーを尊重するほど、余裕はなかった。また昼間は停電時間であったにもかかわらず、おばあさんのお話を録音したいという私どもの切なる希望を入れて、遠くにある村の自家発電所へかけつけて送電して下さる方があった。生涯忘れられない川井の昼まムカシであった。[1]

これは、昭和三十四年（一九五九）八月、岩手県九戸郡山形村大字川井地区（現在の岩手県久慈市山形町川井）において國學院大學説話研究会がおこなった調査報告である。重い録音機器を背負い込み、汗にまみれながら美代媼の語りに耳を傾け、その語りを録音する意義を熱心に説明した都会から来た若者。その思いを汲み取り、日中は停電時間にも関わらず村の自家発電所へ送電のために走ってくれた山形村の方々。この調査は、両者の密なる関係性からなし得たものだったといえよう。[2]また、口承文芸資料集に記録されていることばは、「インフォーマントとフィールドワーカーとのかかわりの中から現象されてきた言説」[3]と指摘されているが、それを生み出す前提として語り手（話し手）と調査者の密なる信頼関係が担保となっており、それは対面を通じて醸成されるものだといえる。

こうした事例をふまえてみると、新型コロナウイルス感染症の流行が長期化する中、「密接」を避けながら対面を伴うという難しい課題に直面し、私たちは戸惑いながらもこれと向き合い続けてきたのが、この半年といえるのではないか。このような現状をふまえて、米屋氏や根岸氏も指摘しているようにＬＩＮＥやＷＥＢ会議システムを利用したオンライン上での語りの実践が当面なされてゆくだろう。あるいは、コロナ禍以前からおこなわれている動画共有サービス上で語りをアップしていくことは、今後も増加すると思われる。[4]さらに、感染者の比較的少ない地域では、感染症対策を充分に講じた上で、対面での調査や語りの実践をおこなうことも今後段階的に実施されてゆくだろう。

だが、新型コロナウイルス感染症の流行は、しばらくの間、終息する気配は見えない。立ち止まっていても「語り手は歩いてこない」[5]のである。戸惑いながらも調査研究・語りの実践を継続していくことで、かえって見失っていたものが見えてくる可能性もあるのではないか。現在このウイルスを原因とする世界を取り巻く様々な状況を「禍」とのみとらえず、「塞翁が馬」